

ヘブル人への手紙9章 「もっと偉大な、完全な幕屋」

1A 地上の幕屋 1-10

1B 初めの契約 1-5

2B 第一の幕屋の存続 6-10

2A 血による契約 11-22

1B キリストご自身の血 11-14

2B 遺言者の死亡 15-17

3B 初めの契約に流された血 18-22

3A 聖所のきよめ 23-28

1B 天の本体 23-24

2B ただ一度の献げもの 25-28

本文

ヘブル人への手紙9章を開いてください。私たちは、ヘブル8章から、主イエスが大祭司として、地上の幕屋ではなく、天の聖所において奉仕をしておられることを学びました。そして、もう一つの話題がありました。新しい契約です。かつては、モーセを仲介者にする契約がイスラエルと立てられて、それで、地上の幕屋の奉仕がありました。今は、新しい契約の約束が与えられているということです。9章はその続きです。主が、天における聖所で成し遂げられたことを、さらに詳しく説明しています。

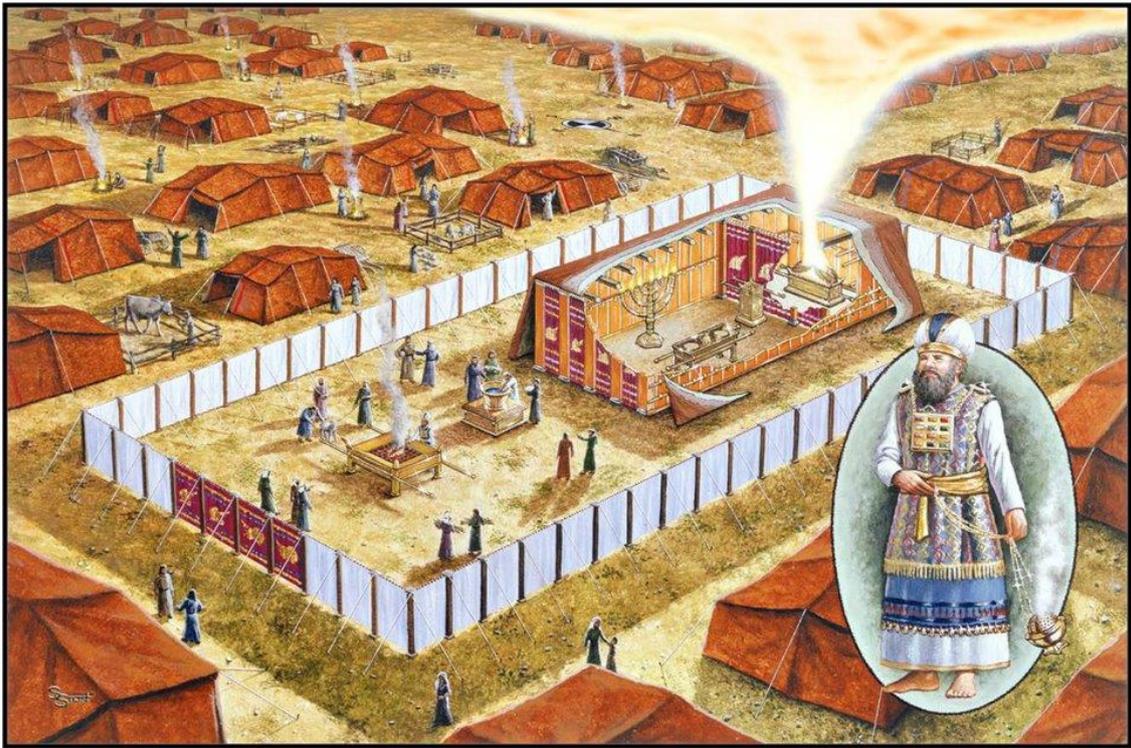
1A 地上の幕屋 1-10

1B 初めの契約 1-5

¹さて、初めの契約にも、礼拝の規定と地上の聖所がありました。

初めの契約とは、モーセの契約、古い契約のことです。主が、シナイ山のふもとで、モーセを通してイスラエルと契約を結ばれた後に、再びモーセを山に登ってくるように命じられます。それが、出エジプト記24章に書いてあります。25章から、主は、シナイ山の上で幕屋について教えます。

²すなわち、第一の幕屋が設けられ、そこには燭台と机と臨在のパンがありました。それが聖所と呼ばれる場所です。³また、第二の垂れ幕のうしろには、至聖所と呼ばれる幕屋があり、⁴そこには金の香壇と、全面を金でおおわれた契約の箱があり、箱の中には、マナのに入った金の壺、芽を出したアロンの杖、契約の板がありました。⁵また、箱の上で、栄光のケルビムが「宥めの蓋」をおおっていました。しかし、これらについて、今は一つ一つ述べることはできません。



これが、聖所の中身です。板を組み合わせて造り、その上を幕で覆います。東の方角から入るところは、幕になっています。しかし、その中にさらに垂れ幕で仕切り、手前を聖所、その奥を至聖所と呼びます。中に入ると左手に燭台があります。ヘブル語ではメノラーと呼ばれているものです。祭司は絶えず、その火がともされているように油の調整を行ないます。そして、右手にはパンを供える、臨在のパンの机があります。十二のパンは、イスラエル十二部族を表しています。週ごとに新しいパンに取りかえます。祭司はそれを食べて礼拝をささげます。そして、正面には金の香壇があります。香がたかれて、それは主への祈りとなります。この場所が聖所と呼ばれるところです。

そして垂れ幕があります。垂れ幕をくぐると、至聖所です。そこには、契約の箱があります。契約の箱の中には、「マナのに入った金の壺、芽を出したアロンの杖、契約の板が」がありました。マナのに入った壺は、荒野でマナが与えられたことの記念として、アロンの杖はコラが反乱を起こした後に、アロンを神が選ばれたことを示すものでした。そして契約の箱の上に、純金で出来た宥めの蓋があります。二人のケルビムがちょうど翼を交差させる形で向き合っています。そこは燭台のような照明器具がないにも関わらず、光り輝いています。なぜなら、主がそこにおられるからです。

ところで、香壇が至聖所の中にあるように書かれていますが、ここの正確な訳は「香に属するもの」となっているそうです。香壇は位置としては第二の垂れ幕の手前にありますが、大祭司が至聖所に入る時に、その香壇の煙が中に入るようにして、彼自身が主なる神の聖さによって殺されることのないようにするという目的がありました。ですから、本質的には至聖所に属しているものです。

そして、著者は、ユダヤ人たちはこれらの細部について、よく知っていることなので、「今は一つ一つ述べることはできません」と述べています。それよりも、次のこと、聖所と至聖所の二つがあることを伝えたかったのです。

2B 第一の幕屋の存続 6-10

⁶ さて、これらの物が以上のように整えられたうえで、祭司たちはいつも第一の幕屋に入って、礼拝を行います。⁷ しかし、第二の幕屋には年に一度、大祭司だけが入ります。そのとき、自分のため、また民が知らずに犯した罪のために献げる血を携えずに、そこに入るようなことはありません。

著者は、聖所において、手前のほうを第一の幕屋、垂れ幕で仕切っている、奥にある至聖所を第二の幕屋と呼んでいます。祭司が奉仕をしていると言っても、ほとんどすべてが第一の幕屋で行われています。燭台の灯や、臨在のパンを整え、またパンを食べることです。これらのことを行っており、第二の幕屋、至聖所は、開かずの扉とは呼びませんが、年に一度だけ大祭司のみが入ります。この違いについて、著者は言いたかったのです。

その年に一度の祭事は、宥めの日、ヨム・キプールと呼びます。レビ記 16 章と 23 章に書かれています。16 章に、大祭司が行うべきことが書かれています。大祭司が至聖所に入って、イスラエルの罪の贖いをする日です。大祭司はいつもの装束ではなく、白い亜麻布の装束に着替えます。そして、一頭の雄羊と、二頭の雄やぎを用意します。大祭司が至聖所に入るとき、彼は罪を持っていますから、まず自分の罪のためにいけにえをささげて、きよめられなければいけません。そして、その流された血を携え、また炭火で香をたいたものを持って、至聖所に入ります。香から出て来る煙が宥めの蓋を覆うようにします。このようにして、自分自身が聖なる神の前に出ていく時に、打たれないようにします。そして、携えた血を宥めの蓋の前で振りかけます。

それから大祭司は外に出てきて、今度は先ほどの二頭のやぎのうち、くじびきによって一頭はイスラエルのための罪のいけにえとし、もう一頭はアザゼルとして生かします。大祭司は罪のためのいけにえをほふって、その血を携えて至聖所に入ります。ところで、宥めの日における幕屋の中での奉仕は、すべて大祭司一人で行なっています。他の祭司はこの奉仕に加わることはできません。そして、イスラエルの罪の告白をします。それから血を再び宥めの蓋の前で振りかけて、至聖所から出てきます。そして、残りのやぎ、アザゼルに手を置いて、罪の告白をした後、荒野に解き放ちます。このやぎが荒野に遠くさまよってから、見えなくなったのを確認して、大祭司は、イスラエルの罪が清められたことを宣言します。こうした罪を赦す働きを、大祭司が年に一度行なうのです。

⁸ 聖霊は、次のことを示しておられます。すなわち、第一の幕屋が存続しているかぎり、聖所への道がまだ明らかにされていないということです。

聖霊が示しておられる、と言っていますが、著者は聖霊に導かれて、この手紙を書いています。第一の幕屋、つまり、至聖所の手前の聖所が存続しているということは、まだ、主の御座の前に近づく道が完全には、開かれていないということです。奥に隠されているということです。

実は、著者がこの手紙を書いている時に、すでに聖所への道が明らかにされた時がありました。午前礼拝でもお話ししましたが、聖所の中の仕切りの垂れ幕が、上から下に裂けたことがあったのです。それが、主が十字架の上で死なれた直後です。その時に、主の御座を示す至聖所が、そのまま仕切りなしに、入っていくことができる道が開かれたのです。けれども、おそらくその後で修復して、再び神殿礼拝を開始させたのでしょう。キリストの十字架における死で、神の御前に恵みによって大胆に近づく道が開かれたのに、それでも、まだ、不信者のユダヤ人には、完成されていないものとしてみなしていました。

⁹ この幕屋は今の時を示す比喻です。それにしたがって、ささげ物といけにえが献げられますが、それらは礼拝する人の良心を完全にすることができません。¹⁰ それらは、ただ食物と飲み物と種々の洗いに関するもので、新しい秩序が立てられる時まで課せられた、からだに関する規定にすぎません。

第一の幕屋で仕えている時に、目の前に垂れ幕越しには、主の御座が置かれているのに、そこには入ることができていません。完全にされていないことを示しています。それが、今の時の比喻なのだ、著者は言っています。つまり、地上にある神殿で主に仕えているのですが、そこに、数多くの牛や羊、やぎを連れて来て、いけにえとして献げているのですが、それによって、主の近くまでは来ているかもしれないけれども、御前にまでは至っていないということなのです。

ここで著者が何を問題にしているかという、「人の良心」です。主の前に近づく時のあらゆる儀式が、からだ、すなわち外側に関する事柄であることに注目してください。食物、飲み物、種々の洗いですが、それはからだに関することです。その人の思いにある良心にまで及ぶわけではありません。外側に関する儀式であり、良心を清めるところまでいかないのです。いや、清めたとしても、完全ではないのです。ここが、最も著者が気にしていることなのです。

なぜなら、ここの良心のきよめが完全にされていなかったら、主がこれほどまでにイスラエルに近づいてくださり、彼らの住んでいる只中に、幕屋があつてご臨在されていたのにもかかわらず、それでも彼らはことごとく、契約を破ってしまいました。それは、自分たちにある良心が完全に清められておらず、それで罪を犯してしまうのです。それで、ヘブル 8 章にて、私たちはエレミヤが預言した、新しい契約を見たのでした。「8:10b わたしは、わたしの律法を彼らの思いの中に置き、彼らの心にこれを書き記す。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。」

これは、ユダヤ人に限らず、キリスト教の中でも存在していた課題です。宗教改革がその一例です。ルターは、弱く小さな人間である自分がミサを通じて巨大な神の前に直接立っていることに恐れすら覚えたそうです。当時から彼はどれだけ熱心に修道生活を送り、祈りを献げて心も平安が得られないと感じていました。いくら禁欲的な生活をして罪を犯さないよう努力し、できる限りの善業を行ったとしても、神の前で自分は義である、すなわち正しいと確実に言うことはできない、ということでした。ところが、ローマ 1 章 17 節にある、「義人は、その信仰によって生きる」という言葉から光が与えられ、自分を義とするのは、ただ信仰によってのみであり、もっぱら神の恵みによるのだということを悟ったのです。

そして、「新しい秩序」と言っていますが、キリストが、メルキゼデクの例にならって、とこしえの大祭司となられたという秩序のことです。次からその秩序が始まったことを教えます。

2A 血による契約 11-22

1B キリストご自身の血 11-14

¹¹ しかしキリストは、すでに実現したすばらしい事柄の大祭司として来られ、人の手で造った物でない、すなわち、この被造世界の物でない、もっと偉大な、もっと完全な幕屋を通り、¹² また、雄やぎと子牛の血によってではなく、ご自分の血によって、ただ一度だけ聖所に入り、永遠の贖いを成し遂げられました。

キリストが来られました！「すでに実現したすばらしい事柄」の大祭司とのことですが、そうです、キリストが、これまで律法の下にいた者たちに、来るべき救いの約束をもたらしました。肉体を持ってこられて、十字架上で贖いを成し遂げられ、よみがえり、天に昇られました。今、神の右の座に着いておられ、執り成しておられます。

そして、「人の手で造った物でない、すなわち、この被造世界の物でない、もっと偉大な、もっと完全な幕屋」とあります。地上の幕屋は、知恵の霊に満たされた者たちによって造られました。そしてモーセが組み立てました。これらは、被造世界での物です。しかし、キリストが通られた幕屋は、被造世界には属していないものです。これが分かるのは、黙示録で見たヨハネの幻です。「20:11 また私は、大きな白い御座と、そこに着いておられる方を見た。地と天はその御前から逃げ去り、跡形もなくなった。」とあります。主が最後の審判を行われる時に、地と天は跡形もなくなりました。では残っている御座は、一体何なのか？とといいますと、被造世界にはない、主の御座なのです。

そして、21 章に行きますと、新しい天と新しい地が造られています。そこに、「21:2 私はまた、聖なる都、新しいエルサレムが、夫のために飾られた花嫁のように整えられて、神のみもとから、天から降って来るのを見た。」とあります。神の御座のある天が、新しい神の都として降りてきているのです。天地は過ぎ去っても、なおのこと残っている御座、それがここで言っている、被造世界

の物ではない幕屋であります。

そして「もっと偉大な、もっと完全な幕屋」ということです。ヘブル書の鍵になる言葉は「さらに」です。旧約における幕屋も、偉大であり、優れています。主が、そのようにして民の間に住んでくださいました。しかしキリストの入られた幕屋は、もっと偉大で、もっと完全であります。

「完全」に「さらに」という言葉を使えるのか？という疑問が湧くかもしれません。完全なのだから、さらに、なんて言えないでしょ？と思うでしょう。「十全」とか「完熟」という言葉を使えば分かるかもしれません。旧約の秩序は、真理へ導くための家庭教師であり、霊的に幼児のものであり、そこから新約の秩序の中に入り、完全な大人になるという考えが背後にあります。パウロがこう説明しました。「ガラ 4:8-10 あなたがたは、かつて神を知らなかったとき、本来神ではない神々の奴隷でした。しかし、今では神を知っているのに、いや、むしろ神に知られているのに、どうして弱くて貧弱な、もろもろの霊に逆戻りして、もう一度改めて奴隷になりたいと願うのですか。あなたがたは、いろいろな日、月、季節、年を守っています。」

私たちが、地上で行うこと、教会の中で行うことさえも、天の現実に応答する中で動かないといけません。天に属する教会でさえ、先ほどの宗教改革者ルターの事例のように、教会という目に見える組織に拠り頼み、その目に見えるもので判断して、それで神に近づこうとする時に私たちは、この過ちを犯します。キリスト者の成熟は、キリストがまことの聖所でご自身の血を携えていかれた、という、目に見えない、天の実質に根ざしているかどうかで、決まってきます。

そして、「雄やぎと子牛の血によってではなく、ご自分の血によって」とあります。血が流されたということは、旧約時代も優れていますが、それには限界があることを次の章、10章で詳しく学びます。その違いは、家畜のいけにえはその人の罪は覆うことすれ、取り除くことはできません。神の御子キリストの血こそが、罪を取り除き、良心を清めることができます。

そして、「ただ一度だけ聖所に入り、永遠の贖いを成し遂げられました」とあります。地上では、年に一度、大祭司が入っていきます。ずっと繰り返されます。けれども、キリストはただ一度で行われました。それは、主がなされたことは、永遠の効力があるからです。「永遠の贖い」とありますね。地上の大祭司のしていることは、一年しか持たないと言いますか、その効力に限界があり、一時的なものだったのです。けれども、御子の贖いは、永遠に効力のあるものです。ですから、ただ一度、繰り返す必要がないのです。

¹³ 雄やぎと雄牛の血や、若い雌牛の灰を汚れた人々に振りかけると、それが聖なるものとする働きをして、からだをきよいものにするのなら、

血や灰のふりかけについては、民数記 19 章にあるおきてを読まないと分かりません。赤い雌牛についての話です。このきよめの働きは、コラの反逆の後での出来事に出てきます。コラとその仲間が、生きたまま陰府に投げ込まれました。それを見た民は、「主の民を殺した」と言って、モーセとアロンにつぶやきました。そこで主は、イスラエル人が打たれて死ぬようにさせましたが、その中にアロンが火皿をもってかけよりました。それで、ようやく裁きが収まりました。そして主は、アロンの杖にアーモンドの実を結ばせることによって彼が祭司であることを、証しされました。

このときに、主は、赤い雌牛を用意しなさい、と命じられました。これを宿営の外で焼いて、その灰を水に入れて、それをもて死体に触れた人々を清めるようにしなさい、と命じられました。イスラエル人が神に打たれて死んでいたのも、その遺体を運ぶなどして触れて汚れている人々がきよめられる必要があったのです。

¹⁴ まして、キリストが傷のないご自身を、とこしえの御霊によって神にお献げになったその血は、どれだけ私たちの良心をきよめて死んだ行いから離れさせ、生ける神に仕える者にすることでしょうか。

「まして」という言葉から始まります。その死んだ雌牛のいけにえの灰が、人をきよめるのであれば、ましてや、生きたキリストご自身の血は、どんなにか人をきよめることか、ということです。キリストは、「傷のない」方でした。これは、いけにえに使われている言葉です。主にささげる牛や羊は、傷のないものでなければいけません。イエス様に欠けはありませんでした、十字架に付けられる時に、誰もがこの方に罪はないと証言しました。

そして、「とこしえの御霊」によって、献げられました。イザヤ書 11 章には、キリストに主の霊がとどまる預言があります。その御霊によって、主がバプテスマを受けられた時に、鳩のようにして下ってこられ、そのまま御霊によって、荒野に導かれ、サタンの試みを受けました。このようにして、御霊が、主ご自身の十字架への受難の道も導かれておられ、そして苦しみを経られたのです。

そして、ささげたものは、ご自身の「血」です。この血による効果が、「良心をきよめる」ことがあります。そのために、「死んだ行いから離れ」ることができるようにして、「生ける神に仕える者」になります。ここが極めて重要です。私たちが変わるための決め手になるものは何か？それは、良心です。良心が清められていないので、私たちはその罪悪感から、それを打ち消そうと自分の行いによって償おうとするのです。それを何とかして取り除こうと思って、ある人は他人にたくさん話をするし、ある人は作り笑いをするし、ある人は趣味に没頭するし、ある人は仕事で気を紛らそうとするかもしれません。そして、これが、いわゆるキリスト教的な活動によって消化しようとしてしまうのです。人間的に表現するなら、強迫観念に陥るのです。

しかし、その罪を、そのままキリストの十字架の前に、キリストが十字架で流された血の中に持っていく時に、その良心が完全に清められます。そうすれば、自分がこれまで止めようと思っていた悪い行いから離れることができます。そして、これまで神に仕えたいと思ってもできなかった葛藤から解放されて、喜んで主に仕える自由を持ちます。

2B 遺言者の死亡 15-17

¹⁵ キリストは新しい契約の仲介者です。それは、初めの契約のときの違反から贖い出すための死が実現して、召された者たちが、約束された永遠の資産を受け継ぐためです。

キリストがご自身の血を流して、死なれたことによって、新しい契約の仲介者となりました。そして、イエスが死なれたことによって、その契約が有効になりました。

そして、初めの契約において約束を受け継ぐことができなかった人々が受け継ぐことができるようになりました。アブラハムに与えられた世界の相続は、旧約時代の聖徒たち、召された者たちは受け取ることができませんでした。律法に従えば、彼らは完全な形で義と認められえなかったからです。だから、すべての死者が陰府に降らなければいけません。けれども、キリストが死なれました。律法が要求している死刑をキリストが満たしてくださいました。そこで当初の約束である、アブラハムに与えられた世界の相続の約束が彼らも受け継ぐことができるようになったのです。陰府にいる者たちが、囚われていた者たちが贖い出されて、キリストによって天に入ることができたのです。そして、「約束された永遠の資産を受け継ぐ」ようになりました。

¹⁶ 遺言には、遺言者の死亡証明が必要です。¹⁷ 遺言は人が死んだとき初めて有効になるのだから、遺言者が生きている間には、決して効力を持ちません。

著者は、ここから契約における血の効力を話していきます。私たち日本人の宗教では、水による「身の清め」であるとか、お祓いによる穢れの清めであるとかありますが、聖なる神と私たちとの関係はそのような表面的な関係ではありません。血が流される必要があります。

初めに、遺言の話をしています。この遺言という言葉と、15 節の「契約」という言葉は同じギリシア語「ディアセーケー-διαθήκη」が使われています。契約という言葉そのものに、遺言、つまり死という意味が含まれています。誰かが死ななければいけません。アブラハムが、神と契約を結ぶときに、彼はいけにえの家畜を真っ二つに裂きました。その中を神が通りましたが、契約を破ればこのようになる、という意味でした。そして、遺言は、もちろん遺言者が死ななければその効力はありません。自分の父親に仮に1億円の資産があったとしても、彼が生きている間は相続することはできません。遺言に書かれていることは、遺言者の死によって有効になります。

3B 初めの契約に流された血 18-22

¹⁸ ですから、初めの契約も、血を抜きに成立したのではありません。

新しい契約において、そのしるしは、イエスの流された血でありましたが、どの契約においても、血がともなっていました。血によって、成立していたのです。

¹⁹ モーセは、律法にしたがってすべての戒めを民全体に語った後、水と緋色の羊の毛とヒソプとともに、子牛と雄やぎの血を取って、契約の書自体にも民全体にも振りかけ、²⁰「これは、神があなたがたに対して命じられた契約の血である」と言いました。

モーセが、十戒を受け取り、また、裁判官のための定めを神から受け取って、民の前に現れました。出エジプト記 24 章にあります(5-8 節)。契約の書全体、民全体という徹底ぶりです。そして次も、驚くべきことです。

²¹ また彼は、幕屋と、礼拝に用いるすべての用具にも同様に血を振りかけました。²² 律法によれば、ほとんどすべてのものは血によってきよめられます。血を流すことがなければ、罪の赦しはありません。

幕屋と礼拝の時の祭具にも、血を振りかけていきました。それは、血によって清められるからです。ちょうどこれは、分かりやすく言うと、私たちの間に感染者が現れて、家族の人たちを中心に、感染した患者さんの触れるものは、すべてアルコール消毒するのと似ています。血によって、すべてを清めるのです。

その清めとは、もちろんウイルスではなく、罪です。なぜ血なのかと言いますと、それは、罪に対する対価は死だからです。アダムが主の命じられたことを行わなかったら、死ななければいけないと言われました。ですから、身代わりに死ぬ必要があります。血はいのちを表します。レビ記に、血がいちそのものであることが宣言されています。それで、血を食べることも、いのちを取ることが象徴するので、食べてはならないとレビ記で禁じられています。ですから、血が流されることは、死ぬことを意味していますし、また血そのものが、いのちを示しているのです。このような、尊い犠牲を血が表しているのです。このことによって、罪の赦しと清めが行われます。

3A 聖所のきよめ 23-28

そこで次に、さらに大きな次元のきよめを、著者は取り扱います。

1B 天の本体 23-24

²³ ですから、天にあるものの写しは、これらのものによってきよめられる必要がありますが、天上

にある本体そのものは、それ以上にすぐれたいけにえによって、きよめられる必要があります。

私たちには良心の汚れがあるために、神に近づくことができないという問題がありますが、実は、神ご自身も、ご自身のところに罪人を受け入れられないというジレンマがあるのです。天の聖所において、神が人々を受け入れるお働きをしなければいけないのです。

イエスは、聖霊が世に対して誤りを認めさせると言われた時に、罪について、義について、さばきについて、世にその誤りを認めさせます、と言われました。「ヨハ 16:10 義については、わたしが父のもとに行き、あなたがたがもはやわたしを見なくなるからです。」と主は言われます。天に昇られたイエスを父なる神は受け入れられました。つまり、天はイエスのような義を持っていないといけない、ということです。罪を何一つ犯さなかった人、行為だけでなく、心の思い図ることも含めて完全でなければ天に入ることはできません。

こんなことは無理だ、というのが私たちの反応です。神のところにはいけないという良心の呵責の問題もありますが、神ご自身も、「これでは誰も天に入ることはできない」という問題を抱えておられました。それが、ここで話している「天のきよめ」です。モーセが聖所の祭具を血できよめたように、イエスもご自身の血によって、天のきよめられた、ということです。これで、天はキリストの血という唯一の理由によって、人を迎え入れることができるようになりました。

²⁴ キリストは、本物の模型にすぎない、人の手で造られた聖所に入られたのではなく、天そのものに入られたのです。そして今、私たちのために神の御前に現れてくださいます。

ここからキリストが、天に昇られて行われたことが、十字架で流されたその血を文字通り父なる神に携えていかれたことが分かります。この血によって天がきよめられたのです。その勝利の情景を、私たちは黙示録 5 章で眺めることができます。「5:2-7 また私は、一人の強い御使いが「巻物を開き、封印を解くのにふさわしい者はだれか」と大声で告げているのを見た。しかし、天でも地でも地の下でも、だれ一人その巻物を開くことのできる者、見ることのできる者はいなかった。私は激しく泣いた。その巻物を開くにも、見るにも、ふさわしい者がだれも見つからなかったからである。すると、長老の一人が私に言った。「泣いてはいけません。ご覧なさい。ユダ族から出た獅子、ダビデの根が勝利したので、彼がその巻物を開き、七つの封印を解くことができます。」また私は、御座と四つの生き物の真ん中、長老たちの真ん中に、屠られた姿で子羊が立っているのを見た。それは七つの角と七つの目を持っていた。その目は、全地に遣わされた神の七つの御霊であった。子羊は来て、御座に着いておられる方の右の手から巻物を受け取った。」このように、イエス様が、屠られた子羊として登場します。つまり血を流されたキリストの姿です。他のものでは決してこの世界が贖われなかったのに、この方の流された血が世界を贖うのに有効であった、ということです。

そして、「今、私たちのために神の御前に現れてくださいます」という言葉があります。屠られた子羊は、神の前に立ち、巻物を受け取られました。すると、聖徒たち、つまり教会が、一斉に、子羊が私たちをその血によって贖ってくださった、という新しい歌をうたいます。そして、無数の御使いが神を賛美します。すべての被造物がひれ伏します。このようにして、キリストが神の前に現れてくださって、天が私たちに開かれたのです。

2B ただ一度の献げもの 25-28

²⁵ それも、年ごとに自分の血でない血を携えて聖所に入る大祭司とは違い、キリストはご自分を何度も献げるようなことはなさいません。²⁶ もし同じだとしたら、世界の基が据えられたときから、何度も苦難を受けなければならなかったでしょう。しかし今、キリストはただ一度だけ、世々の終わりに、ご自分をいけにえとして罪を取り除くために現れてくださいました。

大祭司は年に一度、いけにえの血を携えて聖所に入りました。これを毎年繰り返していました。けれどもイエス様は、それを行なわれませんでした。イエス様は、何度も十字架につけられることはありませんでした。ただ一度だけ、十字架につけられたのです。しばしば、二千年前の出来事がどうして今の自分に有効なのか？という疑問を聞きます。その答えがここにあります。イエスのいけにえは、永遠の効力をもっています。その血は永遠の贖いをもたらすのです。今の時代に再び十字架につけられなければいけないような、一時的なものでもなく、無力なものでもないのです。

そしてここには、「世界の基が据えられたときから、何度も苦難を受けなければならなかった」と書いてありますが、つまりキリストの十字架の後の世代の人々のみならず、その前に生きていた旧約時代の人々をも含めて、贖う力を持っている、ということです。

そして、「ただ一度だけ」という言葉が出てきます。究極の、最終の解決です。そして、「世々の終わり」とありますが、世の終わりはその時から始まっています。私たちは、世の終わりというものを時間軸の中に置いてはいけません。もう二千年が経つではないかと思いますが、キリストが来られてからは、いつ何時、再び来られてもおかしくない切迫した時に生きているのだ、ということを知る必要があります。主がもう救いの御業を成し遂げられた、その究極の時代に置かれていて、あとは、主が戻ってこられるのを待つだけなのです。

そして、「罪を取り除くために」という言葉も大事です。これは 10 章で詳しく学びます。罪を覆うということと、取り除くことは違います。キリストが来られて、初めて罪が取り除かれました。

²⁷ そして、人間には、一度死ぬことと死後にさばきを受けることが定まっているように、²⁸ キリストも、多くの人の罪を負うために一度ご自分を献げ、二度目には、罪を負うためではなく、ご自分を待ち望んでいる人々の救いのために現れてくださいます。

ヘブル書の著者は今、「ただ一度」という言葉を人間にも当てはめています。私たちは、何度も死ぬことなく、一度だけ死にます。そして死後に神のさばきがあります。東洋人は、仏教の死生観を持っている人が多いので、死後に、他の人となって生まれ変わると言うかもしれません。あるいは、死んでもその霊が生きたまま、ここら辺を徘徊していると信じています。

しかし、私たちは死という現実を直視しなければいけません。そこには、申し開きがともないます。死というのは、罪から来るものです。元々、死ななくてよかったものが、罪を犯したので死ぬのです。この事実を直視しなければいけません。そして死後に裁きがあります。すべての人が、生きているうちに行ったことにしたがって、神の前で申し開きします。ですから、生きている時に裁判所に行かなくても、自分の人生を支配していた方の前で裁判を受けるのです。このような裁きがあることを、聖書の知識を持っていない人でも知っていると、パウロは論じています(ロマ 1:32)。

そして今度は、キリストの救いについても、同じであることを著者は論じます。キリストの贖いも、繰り返されるものではなく、死が私たちに一度定められているように、一度だけで行われました。けれども、キリストは再び来るではないか？それはどういうことなのか？という質問をする人がいるかもしれません。その答えは、「罪を負うためではなく、ご自分を待ち望んでいる人々の救いのために」ということです。救いが足りなかったから二度目に来るのではなく、救われているから、その完成のために再び戻ってきてくださいます。その「救い」とは、私たちの体の贖いであり、またこの滅ぼされる世界からの救いでもあります。キリストが、神が怒りを下される前に私たちのために、天から下ってこられて私たちを引き上げてくださいます。